

令和4年度冬期 平島ネズミ類駆除計画（案）

1. 目的

近年、生息数が激減しているオガサワラカワラヒワ（以下、オガヒワ）の繁殖地である平島において、ドブネズミによるオガヒワの繁殖阻害リスクを低減するため、オガヒワの繁殖期前にドブネズミの生息密度を低減させる。

2. 対象地域 平島全域（60ha）

※散布作業は全域のうち、アクセスが困難な海食崖や対策効果の低い浜辺を除く約35ha

3. 実施期間 令和4年11月から令和5年3月（散布時期は1～2月）

4. 実施内容

駆除対策全体の流れとしては、まず保全対象であるオガヒワと駆除対象のドブネズミの生息状況について事前モニタリングを実施し、散布計画を作成する。なお、本計画をもって地元関係者との調整を進めたうえで、散布作業を行う。散布後は事後モニタリングを実施する。

(1) 散布作業

平島では手撒きによる殺鼠剤散布とし、散布作業を以下のように設定した。なお、作業直後に平島周辺の海上を航行し、殺鼠剤の海上流出の点検・回収を行う。

- ・使用殺鼠剤：第1世代抗凝血性剤（ダイファシノン）の粒剤（スローパック）
- ・散布ポストの設定（現時点での試算：560ポスト+ α （32ha、16ポスト/ha） 図1参照）
- ・殺鼠剤の分包（1～1.3kgずつを袋詰め）
- ・散布量：約600～800kg/回（1kg～1.3kg/ポスト）
- ・1月と2月の2回散布予定

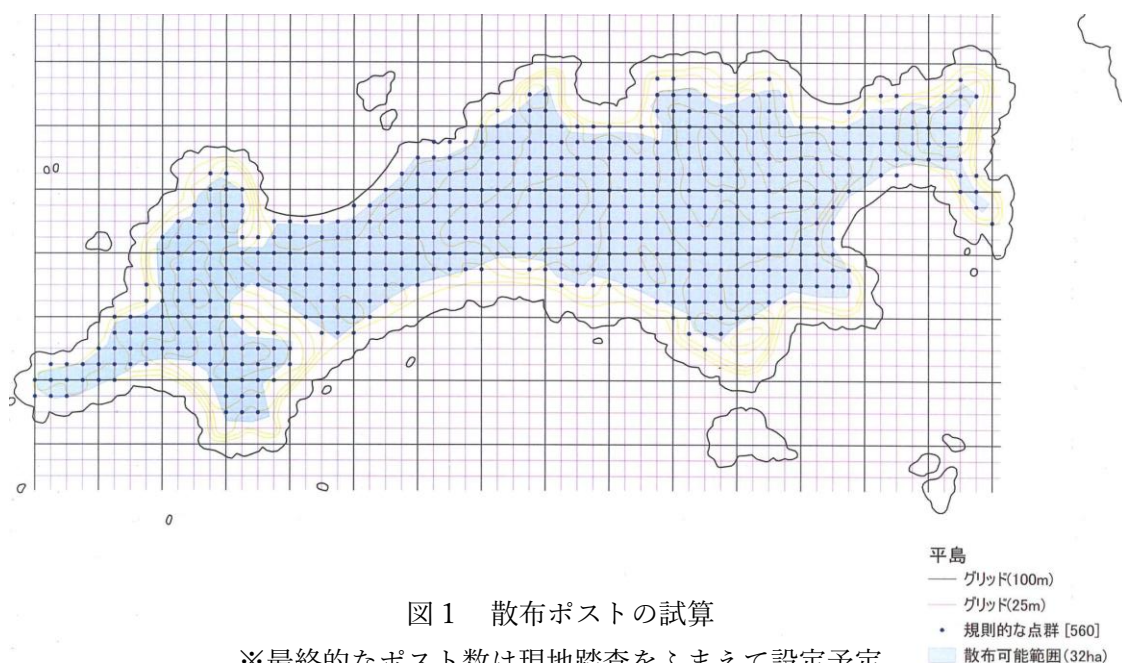


図1 散布ポストの試算

※最終的なポスト数は現地踏査をふまえて設定予定

(2) モニタリング調査

①オガヒワ調査

散布作業前に、大型の人工水場 3 基の近くにセンサーカメラを設置し、散布前後に点検する。

なお、繁殖期には、オガサワラカワラヒワ保護増殖事業実施計画に基づき、ラインセンサス調査も行う（図 2 参照）。

②外来ネズミ類調査

散布作業前に、センサーカメラ 30 台（1 台/2ha）を設置する。なお、センサーカメラ前には BS を設置し殺鼠剤（スローパック）と誘引剤として煮干しを入れる。散布前に 1 回点検し、散布後月 1 回点検する（12～3月）。

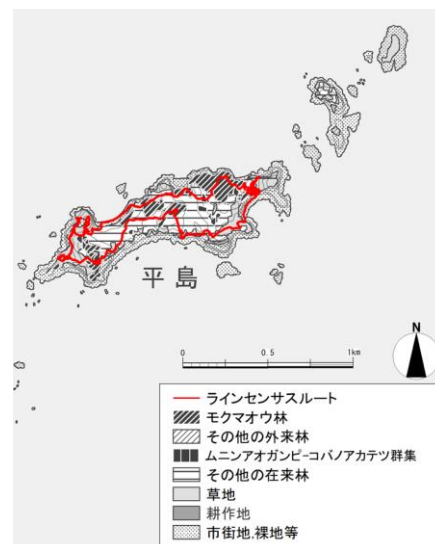


図 2 ラインセンサスルート

出典：オガサワラカワラヒワ保護増殖事業実施計画

5. 根絶に向けた長期的な方針

4. (2) ②外来ネズミ類調査において、ネズミの低密度化が確認された場合、BS 設置や追加の手撒き散布などの根絶に向けた長期的な方針については、オガヒワの平島での生息状況や他島での繁殖状況、非標的種へのネズミ食害の影響等を鑑みながら、環境省をはじめとした他機関と調整を行う予定である。なお、令和 4 年度夏季に平島においてオガヒワは確認されていない。

また、ネズミはオガヒワだけでなく他の在来生物へも大きな影響を与えており、ネズミ駆除後の他島では、希少植物の実生の増加や甲殻類、トカゲの増加などが見られている。ただし、駆除剤を散布し、一時的に密度低下した後、ネズミが再び増加することも想定する必要がある。

【留意事項】

①散布手法

今回選定した手撒きによる殺鼠剤散布についての懸念事項としては、カワラヒワの殺鼠剤感受性が挙げられる。現在、北海道大学及び環境省において、亜種カワラヒワの殺鼠剤感受性試験が行われている。この試験結果をふまえて手法の決定をする予定ではあるが、オガヒワが喫食してしまわないように、繁殖期に平島に飛来する 2 ヶ月前には散布を終え、残留する殺鼠剤が無いように最大限の配慮をすることとする。なお、林野庁事業及び一社 Islands care の自主調査により、繁殖個体数のモニタリングが既に行われていることから、繁殖期間を具体的に割り出すことが可能である。

②非標的種への配慮

非標的種として昆虫類、陸産貝類、水生生物、在来植生（踏圧）等への配慮が挙げられる。殺鼠剤散布にあたっては、荻部先生（昆虫）、環境省の和田氏（陸産貝類）、都レンジャー（その他の在来生物への影響）、IBO の佐々木氏（水生生物）、亘先生（ネズミ類）らに事前にヒアリングを実施することで、アドバイスいただくこととする。

また、オガサワラカワラヒワ保護増殖事業検討会にて諮ることで、他の有識者からの科学的助言もいただくことを想定する。

【小笠原の無人島におけるネズミ対策事例】

ネズミ対策が実施されたことのある無人島面積を比較し、有人島との距離や実施面積が近く、手撒き実績のある南島の数値を参考とした。

①南島

南島では、ネズミ根絶を目指して散布ポストを16ポスト/haで設定し、その地点から殺鼠剤を八方に約1000g/ポストを散布している。手撒きのみでは根絶できなかったためベイトステーション（BS）とカゴわなも併用している。

計820kgの殺鼠剤の搬入に13人工、散布に約10人/日で3日、延べ約43人工かかった。

②向島

向島では、2020年3月の対策開始時にカゴわな約80基による営巣地周辺のネズミの低密度化を図った。事業化後はBSを設置（2020年度240基、約32ha→2021年度320基）し、12～6月の月に1回、200g補充している。最近では100g/回。

1回の補充で、殺鼠剤64kgの搬入とBS入れ替えを4人×3日で実施。

センサーカメラ20台のデータ回収を同年の月に1回で4人日（データ分析は別業務）

③嫁島・媒島

嫁島・媒島では、ネズミ根絶を目指して南島同様のポスト、ポスト当たりの散布量を設定した。

嫁島は、1回目1000kg 2・3回目750kg 4回目500kg 5・6回目380kgを手撒きし、30人工前後/回かかった。

媒島は、1・2回目750～800kg 3回目1200kg 4・5回目1700kg 6回目2100kgを手撒きし、60～120人工/回（他作業含む）かかった。

表 1 島別のネズミ対策一覧

島	面積	実施面積	方法	基点	散布量	備考
南島	34ha	約 30ha	手撒き	486 ポスト	1 回目 600 kg 2・3 回目 300 kg	BS、カゴわな併用
向島	138ha	約 96ha	BS	320 基	12～6 月の月に 1 回、200g 補充 最近は 100g/回	オガヒワ繁殖地 2020 年 3 月カゴわな
嫁島	属島含め 110ha	約 60ha	手撒き	7～9 月に 計 6 回	計 3755kg	2019 年度に駆除 2019 年 12 月以降 ネズミ未確認
		約 60ha	BS	244 基	300g 程度/基 年 4 回補充	
		約 13ha	UAV	離岩礁等	計 571 kg	
媒島	137ha	全域	手撒き	夏季 3 回 冬季 3 回	計 8250kg	2018 年度に駆除 2022 年 2 月に ネズミ駆除完了※
		全域	BS	548 基	300g 程度/基 年 4 回補充	
		約 6ha	UAV	急傾斜地等	計 174 kg	

※駆除完了の定義

小笠原の無人島におけるネズミ対策の、対策後から生息再確認までに最長で 2 年 8 ヶ月という事例にならない、媒島、嫁島においても駆除から 3 年間は重点モニタリング期間とした。その期間中はセンサーカメラによるモニタリングとともに BS への殺鼠剤補充を継続し、ネズミが確認されなければ駆除完了とした。